

Yuki, M. (2003). Intergroup comparison versus intragroup relationships: A cross-cultural examination of social identity theory in North American and East Asian cultural contexts. *Social Psychology Quarterly*, 66, 166-183.

世に広く共有された信念として、日本人を代表する東アジア人は集団主義的で集団を重視する一方、アメリカ人を代表とする北米人は個人主義的で、集団を軽視するとの信念がある。しかし文化心理学における長年のデータの蓄積は、この信念が必ずしも正確でなく、北米人は個人主義的であると同時に集団主義的傾向も強いことを明らかにした。本論文は、この知見をさらに精緻化し、東アジア人の集団行動と北米人の集団行動は、実は量的にではなく質的に異なるという新しい事実を指摘し、さらにそれぞれの行動原理を記述するモデルを提出し、比較文化研究により検証した。集団行動原理の多様性を指摘し、その質的文化差研究という新たなフィールドを切り開いた論文である。集団行動の基本理論として広く受け入れられてきた社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1986) は、内集団ひいきを始めとした集団行動を、人が外集団と比較して内集団を相対的に望ましい地位に置きたがる基本的動機から生じると論じる。だが、比較文化心理学・文化心理学・文化人類学等の先行研究の理論や知見を再検討すると、こうした集団間比較の過程が特に重視されるのは、むしろ“個人主義的”とされる北米社会においてである。一方の東アジア人の集団主義的行動は集団内関係、すなわち内集団の内部に

おける対人関係の調和を維持することを目的としてなされている。日本人およびアメリカ人大学生を対象とした質問紙調査の結果，この仮説が支持された。アメリカ人の内集団に対する忠誠心とアイデンティティの強さは，内集団の等質性知覚と，外集団との相対的地位格差知覚によって規定されていた。一方，日本人の忠誠心とアイデンティティは，集団内の対人関係構造の理解や内集団メンバーとの個人的なつながりの感覚と関連していた。集団過程の質的文化差の存在を初めて指摘した本研究の理論と知見は，社会心理学や文化心理学のみならず，経営学などの領域においても大きな反響と評価を得ることとなり，*Handbook of cultural psychology* (Guilford Press) のチャプター (Brewer & Yuki, 2007) および *Social cognition, social identity, and intergroup relations* (Taylor & Francis) のチャプター (Yuki, 2011) の執筆依頼を受けることなどにつながった。さらには，Oxford University Press より，*Frontiers of Culture and Psychology Series* の一巻である *Culture and Group Processes* の編集を依頼され，現在編集作業が進行中である。

Yuki, M., Maddux, W.W., Brewer, M.B., & Takemura, K. (2005). Cross-cultural differences in relationship- and group-based trust. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 48-62.

数え切れないほどの人々が共に暮らす現代社会が成立するためには，私たちが，それまで何の関係もなかつ

た初対面の他者を信頼し、身をゆだねることが不可欠である。では、人はどのような条件があれば、見知らぬ他者を信頼することができるだろうか。その条件は、文化によって異なるだろうか。本論文では、二つの国際比較実験研究を通じて、こうした“脱個人化された信頼”の基盤の文化差を明らかにした、世界初の研究である。筆者自身の先行研究である Yuki (2003) では、北米人と東アジア人の間に集団行動原理の文化差があることが指摘された。この理論に基づき、本研究では、北米人の脱個人化された信頼は相手との社会的カテゴリーの共有性（共有 vs. 非共有）に基づいて成立しやすいが、東アジア人の場合は相手との間接的な対人関係性（共通の知人の有無）に基づいて成立しやすいとの仮説を立てた。米国の共同研究者たちと行った2組の実験（研究1：場面想定法、研究2：実際に金銭報酬が支払われる行動実験）において、予測通り、アメリカ人は、内集団メンバーを外集団メンバーよりも一律に強く信頼するが、日本人は、相手の所属集団にかかわらず、自分の間接的な知人である可能性の高い人を、そうでない人よりも信頼するとの結果が見いだされた。脱個人化された信頼の基盤について、二つの明確なモデルを提出し、その相対的優勢性に関する文化差の存在を研究史上初めて明らかにした本論文は、社会心理学・文化心理学のみならず、社会学、経営学、組織学、などの社会科学諸領域から多数の引用を受けている。またこの論文をきっかけに、筆者は2011年に発刊された学術誌 *Journal of Trust Research* の Associate Editor への就任を依頼された。

Yuki, M., Maddux, W.W., & Masuda, T. (2007). Are the windows to the soul the same in the East and West? Cultural differences in using the eyes and mouth as cues to recognize emotions in Japan and the United States. *Journal of Experimental Social Psychology*, **43**, 303-311.

近年の表情認知研究は、基本的には文化的普遍性の高いはずの表情認知において、他文化の他者よりも同一文化の他者の表情の方が正確に判断できるという文化差が存在することを明らかにした。しかし、なぜそのような“内集団アドバンテージ”が生じるのかについては明確な答えがなかった。本研究は、文化心理学と神経生理学の知見を統合することを通じて、特に日米両国間の表情認知の文化差が、“目への注目”（日本）vs.“口への注目”（アメリカ）という対比で現れるという革新的な仮説を提出し、それを支持する結果を得た。目の形を司る表情筋は口の形を司る表情筋よりも意図的統御が困難であるとの神経生理学的知見に基づくと、感情表出を抑制することがより頻繁に求められる文化の下で暮らす日本人は、他者の感情を正確に理解しようとするときには、統御が比較的難しい相手の目の形を重視すると予測される。一方、自然な感情表出が許容される北米文化の下では、動きが小さい目の形よりも、より大きな動きを示す口の形に注目して感情判断がなされると予測される。これを検証するための実験を日米で行い、参加者に、顔のイラストまたはモニタージュ写真の目と口の表情を独立

に操作して提示し，そこから読みとることのできる感情を評定してもらった。その結果，予測通り，アメリカ人は口の形の変化に反応しやすかったのに対して，日本人は目の形の変化に反応しやすかった。本研究の意義は，それまでは存在が指摘されるのみであった表情認知の文化差が，具体的に何を原因として現れているのかを，神経生理学と文化心理学の知見を統合する革新的なアイデアによって，研究史上初めて明らかにしたことである。本論文は，生物学，神経科学，高齢者研究といった他分野の国際誌からも引用されるとともに，国内外のメディアからも注目された。さらに，イギリスの学業達成認証機関 OCR によって，2008 年度の心理学分野の “Core Study” に選定された。

Yuki, M., & Schug, J. (2012). A socio-ecological approach to personal relationships. In O. Gillath, G.E. Adams, & A.D. Kunkel (Eds.). *New directions in close relationships: Integrating across disciplines and theoretical approaches*. Washington D.C.: American Psychological Association. pp.137-152.

社会によって人々の対人行動や対人関係の性質が異なる原因を，人々の周囲を取り巻く社会生態学環境の特性の違いから解釈する新たなアプローチを提唱する論文。特に，当該社会に存在する対人関係の選択肢の多寡と定義される “関係流動性” (relational mobility: Yuki et al., 2007) が，友人に対する行動と友人関係に与える効果を論じている。従来の文化心理学理論は，対人行動の文化差

を，文化的自己観(cultural self-construal: Markus & Kitayama, 1991)を始めとする，文化的に共有された意味システムや価値観の違いの表れと解釈してきた。しかしこうした説明には，説明対象となる現象と，その説明のために用いられる概念との類似性・近接性が高く，循環的な議論になりがちだという弱点があった。これに対して本論文は，近年，人間・社会科学諸領域の共通パラダイムとして急速に受け入れられ始めている適応論に基づき，人々の対人行動を，異なる性質を持つ社会生態学的環境への適応方略として捉える立場からの説明を試みた。論文ではまず，近年注目を集めつつある社会生態学的アプローチ(socio-ecological approach: e.g. Nisbett & Cohen, 1996; Oishi & Graham, 2010)の概要を説明した後，本研究で特に扱う関係流動性の概念を説明した。そして次に，関係流動性が様々な対人行動および対人関係現象に与える影響について，対象者自身の研究(Schug, Yuki, Horikawa, & Takemura, 2009; Schug, Yuki, & Maddux, 2010)を含む実証研究のレビューを行った。具体的に扱ったトピックは，(1)“友人”の概念，(2)友人間の類似性，(3)友人への自己開示，(4)外見的魅力の重要性に対する関係流動性の影響である。最後に，以上を踏まえ，社会の環境構造と個人行動との関係を扱う社会生態学的アプローチが，やはり個人間の関係を研究対象とする社会科学・生物科学諸分野に対して与えるインパクトについて論じた。社会生態学的アプローチの観点から対人行動の文化差の原因を明らかにしようとする対象者の一連の“関係流動性プロジェクト”は主に海外から大き

な注目を浴び，カンザス大学・イリノイ大学・ブリティッシュ＝コロンビア大学からの招聘講演依頼や，Society for Personality and Social Psychology の 2012 年大会におけるシンポジウムでの話題提供などにつながっている。

Yuki, M., & Yokota, K. (2009). The primal warrior: Outgroup threat priming enhances intergroup discrimination in men but not women. *Journal of Experimental Social Psychology*, **45**, 271-274.

本論文は，適応論の立場から集団間葛藤の性差について検討した実験論文である。一般に，集団間の葛藤に自発的に参加して競争的に行動する傾向は男性の方が女性よりも強いことが知られている。本研究では，これが男性に深く根付いた心理傾向であるかどうかを検討するため，プライミング法を用いた検討を行った。まず，男女大学生が，実験室においてエッセイ中の名詞を探索する課題を行った。その中で，半数の参加者のエッセイには外集団から侮辱される文章が含まれていたが，残りの半数の参加者のエッセイにはそうした文章は含まれていなかった。その後参加者は，別の課題と称して，実験室内に形成された見知らぬ者同士の集団に振り分けられ，報酬分配課題を行った。その結果，男性のみにおいて，外集団から侮辱される文章に接した外集団脅威群において，そうした文章に接しなかった統制条件よりも強い内集団ひいきが見られるというパターンが見られた。女性については条件間の差が見られなかった。異なる社会間に存在する心理・行動傾向のバリエーションを扱う前出の四

つの研究 Yuki (2003) , Yuki et al. (2005) , Yuki et al. (2007) , Yuki & Schug (2012)とは異なり, 本論文は社会行動の性差を扱うものである。しかしながら, 男性の内集団ひいき行動を, 外集団脅威という外的な適応課題に対処するためのものと解釈する本論文の立場は, Yuki & Schug (2012)における社会生態学的アプローチの立場と一貫するものである。状況プライミングによって男性の内集団ひいきの生起パターンが変化することを示した本研究は大きな注目を集め, 例えば, 進化心理学の先駆者の一人である David Buss 氏による教科書の最新版で紹介されている。